

日本IBM

# コンテナで作りコンテナで動かす 成功のカギはOpenShiftの採用

日本サード・パーティは、顧客のマルチクラウド化ニーズに対応するため、ソリューションの開発・テスト・本番環境のコンテナ化を実現した。その基盤に採用したのが、IBMが提供する「Red Hat OpenShift」である。同社がOpenShiftを採用した理由と先進的な挑戦の軌跡を紹介する。

日本サード・パーティ株式会社 取締役 デジタルトランスフォーメーション事業本部長 為田 光昭 氏



## プラットフォームに依存しない 柔軟なシステム移行ニーズが拡大

あらゆる産業が再定義されていく第四次産業革命の波は、確実に世界に広がりつつある。AIや5Gを取り入れたサービス、車の自動運転はその象徴といえよう。

これらの裏側を支える技術として注目されているのが、クラウドネイティブコンピューティングである。うまく使うとオンプレミスでもクラウドでも、同じように俊敏かつ柔軟にITリソースを利活用できるようになる。

多様なクラウドネイティブコンピューティング技術の中でも、近年特に注目されているのが「コンテナ」だ。OSイメージ上にアプリケーション本体・必要なライブラリ・設定ファイルなどをひとまとめに

した「コンテナ」を作成し、コンテナエンジン上でこれを動作させる。この技術は仮想化のようにホストOSから隔離してアプリケーションの専用実行環境を提供する。その上、仮想化よりも軽量で高速な起動ができ、サーバー管理などの手間も不要とする。そして、このコンテナを連携させれば、ソフトウェア定義でシステムを構築することも可能になる。

この技術を活用し、新たなビジネスモデルを創出した先進企業がある。AIインテグレーションサービス「Third AI（サードアイ）」を提供する日本サード・パーティ（以下、JTP）である。

Third AIの1つである「コンタクトセンターソリューション」は、IBM WatsonなどのAIテクノロジーを活用したAIチャットボットとオペレータによるハイブリッド

な顧客対応を実現する。「自然言語での問い合わせでもニュアンスをくみ取り、回答精度が向上。的確かつ満足度の高い顧客対応とオペレータ業務の効率化を両立します」とJTPの為田光昭氏は説明する。

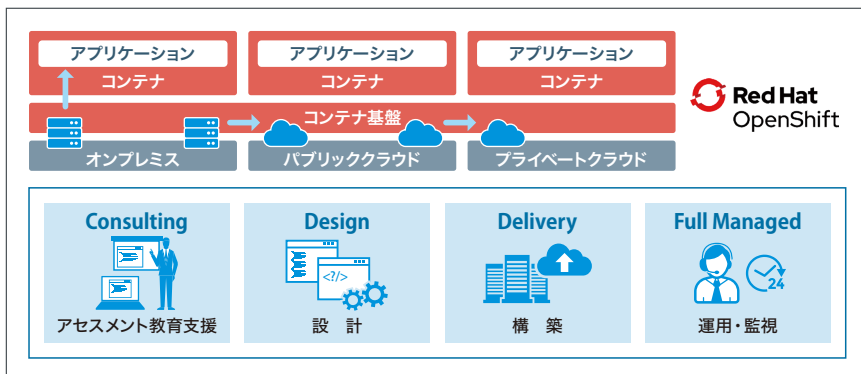
現行は開発・テストに主にAWSを使い、テスト完了したものを本番環境のAWSに移行して顧客に提供する。しかし、テスト環境でうまくいっても本番環境でうまくいかず、ネットワークやミドルウェア設定、データ環境などの調整・変更が発生することがあったという。AWS上のコンタクトセンターソリューションをオンプレミスに移行したいという要望を受けるケースも増えていた。

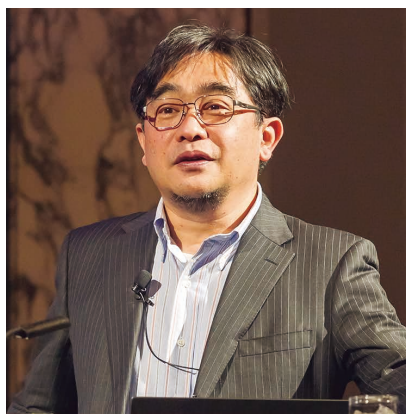
そこで同社が着目したのがコンテナだ。「テスト環境でうまくいくのに本番環境でうまくいかないという不具合の発生がなくなります。コンテナ環境が整備されていれば、プラットフォームに依存しないので、マルチクラウド対応やオンプレミスへの移行もシームレスに行えます」と為田氏は話す。

## 開発から本番環境までコンテナ化 システムはマルチクラウドで稼働

そのコンテナ環境の整備に同社が採用したのが「Red Hat OpenShift on IBM Cloud」である。コンテナの展開、ス

図1●OpenShiftに対応した「Kyrios」のサービスイメージ  
コンテナ基盤とコンテナ・アプリの設計、構築、運用・監視までトータルにサポートする





日本アイ・ビー・エム株式会社

クラウド & コグニティブ・ソフトウェア事業本部  
テクニカルセールス & エバンジェリスト担当部長

高良 真穂 氏

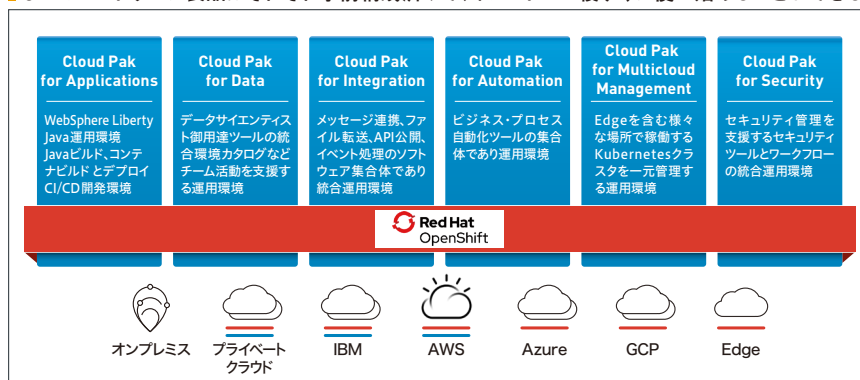
ケーリングや運用管理にはオープンソースの「Kubernetes」が広く利用されているが、コンテナの開発環境は別途整備しなければならない。「その点、Red Hat OpenShift on IBM Cloudは、IBM Cloud上でOpenShiftのワークロードを実行できるマネージド・サービス。開発インフラと継続的なインテグレーションやデリバリを支えるCI/CDツールなどが実装されており、開発・デリバリ・管理を同一のプラットフォームで実行できます」と高良氏は評価する。

さらに、「OpenShiftは簡単な手順で導入でき、そのまますぐにKubernetesが稼働し、クラスタ管理も可能です。IBM Cloud以外のクラウドプラットフォームで稼働しているKubernetes対応アプリとも容易に連携・移行できる点も魅力でした」と高良氏は語る。

これにより同社は、コンテナ・アプリの開発・テスト・本番環境へのリリースまでIBM Cloud上で一貫して行える環境を実現した。コンテナ・アプリによるソリューションの事業化は、国内でも例が少ない先進的な取り組みである。IBM Cloud以外のクラウドやオンプレミス環境への展開を視野に入れた移行プロ

## 図2●IBM Cloud Paksのラインアップ

6つのソフトウェア製品はそれぞれ事前構成済みで、インストール後すぐに使い始めることができる



ジェクトも始動しているという。「スクラム開発に対応しやすく、開発者がアプリ開発に専念できるようになりました。以前は半日程度かかっていたソリューションのリリース工数も、今は数十分で済みます」と高良氏はメリットを述べる。

さらに同社はOpenShiftのメリットと自社で培った技術・スキルを生かし、新サービスを実現。クラウド運用サービス「Kyrios(キリオス)」のサービス範囲をコンテナ環境まで拡大した。「オンプレミスやクラウド上のコンテナの統合管理と運用・監視を支援します。内製化に向けたアセスメントや教育支援も可能です」と高良氏は語る(図1)。

### コンテナをより使いやすくする 「IBM Cloud Paks」を提供

JTPが採用したOpenShiftは、Kubernetesをコアとして企業向けに機能拡張した製品だ。Kubernetes部分を含む3年の長期サポートに加え、開発・実行環境や監視機能など統合環境を提供する。企業向けセキュリティも強化されている。「OpenShiftはパブリッククラウド、プライベートクラウド、ハイブリッドクラウドなどの近代的でダイナミックな環境において、スケーラブルなアプリケー

ションを構築および実行するための能力を組織にもたらします。エンジニアはインパクトのある変更を最小限の労力で、頻繁かつ予測どおりに行うことができます」と日本IBMの高良真穂氏は主張する。

本格化するコンテナ時代を見据え、IBMは新たなソリューション提供にも力を入れている。Red Hat OpenShiftで稼働する、オープンでセキュアなコンテナ化されたソフトウェア・パッケージ「IBM Cloud Paks」はその1つだ(図2)。

例えば、Java実行基盤のWebSphereなどのミドルウェアはコンテナ化され、インストール不要で利用可能だ。可用性、スケーラビリティ、クラスタ管理などの非機能要件をKubernetesに移管することにより、ミドルウェア構成をシンプル化できる。「システム運用基盤が共通化され、特定ベンダーに縛られないため、複数のクラウドサービスの活用やオンプレミスとの併用も可能です」と高良氏は説明する。

より俊敏に、より柔軟にアプリやサービスを提供する上で、コンテナは欠かせない技術である。IBMは今後もコンテナ化を支援するソリューションの強化・拡充に努め、JTPの変革に象徴される成功モデルの創出に貢献していく。

#### ■ お問い合わせ

#### 日本アイ・ビー・エム株式会社

URL ■ <https://www.ibm.com/jp-ja/cloud/redhat>  
TEL ■ 0120-550-210 (受付時間: 9時~17時、土・日・祝日を除く)  
E-mail ■ [CLOUDEDM@jp.ibm.com](mailto:CLOUDEDM@jp.ibm.com)

#### 日本サード・パーティ株式会社

URL ■ <https://www.jtp.co.jp/services/ict/kyrios/>  
TEL ■ 03-6408-2488 (Kyrios 担当) E-mail ■ [sales@jtp.co.jp](mailto:sales@jtp.co.jp)